

# 図書館の愉悦

宮谷 尚実

棲みつきたいくらい魅力的な図書館がいくつもある。いずれにも共通しているのは「自分だけの思い出を作った」とだ。先生に無理をお願いして放課後にギリシャ語を教えていただいた高校の図書館、窓の外の大きなクリスマスツリーに色電球が手作業で設置されるのを眺めながら修士論文を書いた母校の図書館、それから留学先のテュービンゲン大学の図書館たち。昔の貴重な資料は、本館の「歴史的閲覧室」で厳しい監視のなか、必死に手で写したり要約したりした。文学部の広々とした開架式図書館は、コーナーが隅から隅まで頭に入っていて、けもの道まで知り尽くした森のようだった。専門分野コーナー近くの机は自分で決めたいつもの席で、「あなたに会うにはここに来ればいいのよね。だって、この席に住んでるんでしょ」と、友達にからかわれるほど通い詰めた（そのかわり夜や休日は健康的にたつぷり遊んだ）。

図書館は、調べ物をしたり本を読んだり物を書いたりするだけの場所ではない。そこで（声を出さずに）笑ったり、涙したり、本の一行に慰められたり、書かれていることに『そんなことない！』と怒ったり、考えこんだり、悩んだり、そうして樽の中で熟成していくワインのごとく自分なるものがじわじわ静かに作られていく。だから特別な場所なのだ。おとしし出会った素敵な図書館の話しよう。ドイツ中部、やや北寄りに位置するヴォルフエンビュッテルという小さな町に大きな図書館がある。哲学者ライブニッツや作家レッシングといった巨星のごとき人たちがこの図書館に携わっていたというだけで充分に訪れる価値はある。図書館の活動もさかんで、研究者を受け入れるプログラムや態

勢が整っており、私も短期間の客員研究員扱いで快適な寮を使わせてもらったり研究者同士の交流に招いてもらった。学生のための集中ゼミナールも行われているようだった。

この図書館の最も古い建物の閲覧室ブリオテカ・アウグスタは博物館として一般公開されている。十七世紀の蔵書三万五千冊が中心の、実に圧倒的な空間だ。分厚くて大判の本たちが天井から床まで壁全面をびっしり埋め尽くしている。何百年以上もの知の蓄積がどの本からも息づいているようだ。ほとんどの背表紙が白いは羊皮紙だからなのだが、中にはネウマ譜模様の洒落たものも見受けられる。宗教改革の影響もあつてか修道院で不要となった聖歌の楽譜を再利用したものだそう。これらの「表紙」のなかには、音楽史上貴重な資料も含まれているという。この不思議な空間は、どの本からも楽譜からもにじみ出てくる音ならぬ音で満ち満ちているようだった。

実は、最近とても気になっているのは、我らが国立音大図書館の書庫に棲むらしき「ノーム（大地の精）」の存在だ。基礎ゼミの図書館ガイダンスで「目にもとまらぬ速さで出庫指示された図書や楽譜をカウンターに届ける」方がいらつしやると聞いた。たしかに速い。とても手作業とは思えない。ノームの語源は不明だが「地中に棲むもの」だけでなく「知性」という意味もあるらしい。書庫や事務室の素敵なノームたちに支えられて音楽関連蔵書に恵まれた私たちの図書館。ここでも思い出をたくさん作っていききたいし、学生諸君にもそうであつてほしいと願っている。